

開校 150 年記念コラム（第 10 回）

「赤江教育百年誌」には、熱心な教育研究の取組が記されています。「大正時代の赤江教育」の項には、次のような記述がありました。

「思い出の今津校」(永井 婉)

今津小学校は平屋建て、6 教室の小さな校舎でした。先生は 30 までの若い人が多く、文字通り子どもとともに学び、遊んだものでした。

自由教育と呼ばれる風潮が押し寄せて、一人一人の個性を見つけ、その良さを見出し、伸ばしていこうという考えでした。奈良女高師附属校で「伸びていく教育」が叫ばれました。学級経営に悩んでいた私は、奈良まで出かけ、一週間研究させてもらいました。その頃、今津は提灯学校の異名をとったほど、研究会が夜遅くまで続きました。教師が一丸となって子どもの教育に当たった時、いつしか子どもたちも教師の気持ちを汲んでくれたように思います。

先端の機器を活用した教育に取り組んでいた記述もありました。赤江小では、昭和 27 年から昭和 30 年まで「放送教育」の研究に取り組んでいます。

今でこそ視聴覚教育といえば、大体内容が理解できるが、全く聞いたことがない教育用語であった。この教育の重要性に着目した永谷校長は村当局ならびに PTA に謀りラジオ放送設備を整えた。他校に放送設備が設置されるには、もう 10 年を待たねばならなかった。授業の中に放送を取り入れることは、全く考えてもみないことだったから、全く暗中模索の研究であった。幸い NHK 松江支局の応援を得て研究を進めた。「放送聴取家庭の会」が結成され、学校、家庭一体となって放送教育に取り組んだことは画期的なことであった。

時代に先駆けた研究に、学校と家庭が一丸となって向かっていたことが伝わってきます。

これらは、赤江小教育研究の歴史のほんの一端ですが、先輩たちも、悩みながらも熱心に教育研究に取り組んでいた様子がうかがえます。

社会の情報化は大きく進み、視聴覚教育も時代に応じて発展してきました。放送教育も「ラジオ」から「テレビ」へ、そして、今はインターネットを活用しての「NHKforscheol」を利用しています。「一人 1 台タブレット PC (chromebook)」「デジタル黒板 (Bigpad)」「デジタル教科書」・・・と、教育の ICT 活用はますます進んでいます。私たちも子どもたちのために研究に取り組んでいきたいという思いを改めて強くもちました。